



伊地知文庫
文庫20
340



いふは子規の

春の鳥の歌

とて思ふ

清濁

汗

伊地知氏書冊

江南名 珠願家よりいふことを送る

是より將ろを酒を命にむき

あつた武を大樽は造るを江湖をわ

れやいつるぬる人も異なり

ほたる恵ふみして用ふこと

にいつくおぬるを睡るあや

あつてけらるる臨る醒て

日月陽秋にうてのけ雪あけ

乃園を郭公もつたるを
 かき書か人もるるを皆風雅
 乃藻思をいつとて是いつれ
 ちとて乾坤の外なるを
 花のよきを云く毎日は

元禄三六月

越智 越人

花見

翁

木をよみけも鶴を柳の
 西のりといふを
 旅人乃風をさし
 ちとて習ふを
 月詰る假に内裏の
 粉白つくる松を

琢碩
 曲水
 翁
 碩
 水



鞍置る三歳の秋のまて
 名をさふくく 霞る雨 碩 翁
 へ迎に筑後乃涌湯は夕暮る
 中も霞ふれさるに山伏 水 碩 翁
 何の事を唯一ふえふしり
 かきさふらるるをばりり 水 碩 翁
 抱きさふらるるの喰やふれ 水 碩 翁
 月ふれ親乃神れもさる 碩 翁

秋風さる船をさるる波のま
 鷹ゆくくや 白ふら松 翁 水
 小新橋花乃盛れ一丈田 碩 翁
 巡礼死めるるのをさる 水 碩 翁
 何より足城の現さあたる 翁 水
 又出さるるのさるる 碩 翁
 四羅くりたふらるる 水 碩 翁
 熊野さふらると泣あひり 翁

と来うにけふ言ふの頌は
酒でもけたれあはぬ酒
みふの目をのそくまで著る
假れ持佛よむふ念仏
中くは土間を歩むる
一ふたふと里をちかむる
将ねくくぬ酒乃おを
月一ふくくは明後る月
水 頌 翁 水 頌 翁 水 頌

花落あつるをいけく
唯四方する草庵に
一貫れ銭むくくや
醫者乃くくくく飲ぬ
花咲くく 苦野あつる
蛇くくくくくくの中
水 頌 翁 水 頌 翁 水 頌

翁 十二
弥頌 十二

曲水十二

二十四

城碩

いろく乃々毛むうーやまのま
うそれと嫌わうまはさあぬ
蝙蝠乃のやうなつをさうとて
かき亀乃とをさうぬけり越え
は京蘇の字をいふすに今るる音
親子あういそ月まおらふ
今 碩 今 路通 翁

七十五

秋のそ宮もろをこそ移ひしあ
こやうされていこころあ侍
うつり香乃御殿を首よひとあひ
小六うさひ——市からかたは
鮎釣乃ちいさく思ゆる川の端
念佛よてたつむるつとこ
う——らほし菜もうねとまねき
左近き里乃大よねやうされ
全 碩 全 通 全 碩 全 通

娘婆雅と人乃姫つれと
花きあひよ月ハ勝夜
あふのさす縁のふを和言り
生鯛あつゝ浦からすまや
け村のへるさふ醫者あふり
あふらんをけいそのさうとふ
かきうさふ女医退席もあふ
あふはちす酒乃はあふ
人 全 碩 全 通 全 碩 全 通

な、みある花乃夕々をさひき
蕎麦ま白り 山中 人中
うきんうき 雲乃さつれの月夜
さきもつ子のこころ裸出
あつ— ちやもきこともある
文珠のちやもき 般若持の愚癡
あれが威又ちやまひ 不味憎
何ともさぬよ なる 弱棚 人

志乃小娘のた—うきとちやま
まうふうき 顔をさぬあ—て
汗の香をかえそ衣をやめし
志きうに雨さうちあひふ
花乃うり又百人ちや 服ちよ
すきい娘ともたもちやこる 娘 今

跡九

一

通八

十

越人八

城下

野
佐

鉄炮乃遠音に昇る外月

砂の小ま乃瘦て

雨凡もすわの小貝拾

なまぬる一川餅モラひ

碁へさく人志

秋の菖蒲花を

里東

泥土

乙州

怒誰

弥碩

女師花の細まに花をりて 筆

目の中にもく見えがらある 野徑

今ふと又川をゆきとて入へ 里東

顔乃れはうゝま生つといや 泥土

馬は石部を渡さうやとて 乙刈

一里を越え 山乃下前 怒誰

見えきて云をよむもあはれ 泥土

おれをいへ 洞雨のうゝれ 里東

雪舟は雪越の梅をみえに 野徑

き歩にうゝあゝ下前を越 乙刈

月花はうゝををよむもあはれ 珙碩

若菜をみえ乃塩をみえ 怒誰

くねまをみえもあはれ 里東

中をみえもあはれ 珙碩

乃みにあゝ 花酒の首の一瓢 乙刈

古きもくちかうのゝゝ 強倉 野徑

時くを百姓もくも烏帽子
 配可きりふふ供御乃蛤
 多やかきハ船出買者位やん
 連も力も皆さ度所なり
 か風乃大罽寺繩より通
 貴乃こころに用叶へる
 糊剛さくおろしきさき
 子迎歩る月々茶食場も寺
 怒誰 泥土 野徑 里東 乙所 泥土 怒誰

看後乃嘸^{セキ}はゆさき
 四十多老きうふさき
 髪うせに枕乃旅を渡さ
 醉を細多ふあき吹く
 牧村乃花ハ多き葉も面も
 田より片隅み苗乃少り
 里東 珠碩 乙所 野徑 怒誰 泥土

野徑 六
 里東 六

泥土六

乙卯六

怒誰六

珎碩五

筆一

雜

乙卯

龜乃甲嘉るる時ハ鳴も甚

唯牛番其ハ何乃くさる者

百姓乃木綿^被仕まへみのをとて

小寺せうゆるかゝうしの縄

獨寐く奥乃間ひるを旗の舟

幡唄^一居てさゆるちね

珎碩

王赤

探志

昌房

正秀

秋萩乃御前よりちよと増え荒
 風長れが城乃ちよと成り
 常乃ちよと成りて後都
 常乃ちよと成りて後都
 初花は雛の事指し居たり
 人のそとよと成りて後都
 内庭乃ち香に成りて後都
 常乃ち起りてはよと鳥啼

及肩
 野後
 二嘯
 乙所
 羽衣
 里東
 探志
 呂家

秋入乃ち中より月より
 ちよと上京をふゆやとむ
 蓋は蓋鳥羽の町を今年来
 雀をちよと 麓乃ち起りて
 ちよと起りてはよと鳥啼
 秋入乃ち中より月より
 ちよと上京をふゆやとむ
 蓋は蓋鳥羽の町を今年来
 雀をちよと 麓乃ち起りて
 ちよと起りてはよと鳥啼

平秀
 及肩
 野徑
 二嘯
 乙所
 珍碩
 里東
 探志

暗かりし茶籠乃下をよめ付
 昌房
 聴るを呼るふまわり口
 正秀
 いさるる結一筋に狭帯
 及肩
 あり汲かゆる鯉棚乃秋
 野徑
 けりくゆ切替の張る風で
 二嘯
 なか乃序ももの水月
 乙羽
 冷あゝ味のつくそを結り色
 弥碩
 標柳—ふらん次ふおちる
 里東

目をめく尻先のうそをよめ付
 標志
 ころろをかろそとふれと侍
 昌房
 ころろふふ自裁移りて腰にけ
 平秀
 縄をよめある寺廿と次
 及肩
 花乃比肩の日待ふそをよめ付
 野徑
 ころろよねの獅子のまん
 二嘯

乙羽 四
 弥碩 全

二	野	及	正	冒	探	里
嘯	徑	肩	秀	房	志	東
全	全	全	全	全	全	四

田野

平秀

嘯道や苗代時乃角大師
 明きさうまふむ野一氣乃顔
 け浦ふとのやえに鳴一まの元
 かまゑたう一き門に乃文字
 月歌又利休乃家を鼻の魚
 度一芋をまゝゝゝゝの
 碩 全 秀 全 孫碩

虫を皆つ獲くや時やむ 秀
 片足くの木復くらぬる 碩
 誓文を百もあてあはる 秀
 なくくくり供の侍 碩
 須广いふと物ふ自由なる 秀
 瓶乃忍るうかきまゝやる 碩
 月氷る降きお空の銀河 秀
 無理ふ居る胆も進た 碩

了ぬわくく大脇指を歩られて 秀
 獨ある子も^{チヤホ}縁鶴う智られ 碩
 江戸酒を花塩皮に衣いり 秀
 あい乃山彈まろ乃入る 全
 雲雀啼里を^{ニヤコ}厭棄^{ハミ}なう 碩
 火を吹くやる 禅門の祖父 秀
 本堂ハあゝ荒壁乃うらぬ 碩
 羅綾子秋をうらぬ 秀

歯を痛人の髪を結ぶや
 藤垣乃窓の紙端を挟む
 口上果ぬいよとすけ時宜
 多ふやうよ小判をさす華袴
 秋入初る肥後ちり隈本
 幾り後も留て月見る役者船
 寸布子いさうおきやう
 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

沢山は元めくや吃らしく
 呼あまらやも猫を撫さす
 子祝は小人所乃雨あらし
 やー海の楓木の芽萌立
 菱花は雪路枕つるきあり
 水野まゝる場にまゆみ
 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

正秀 十九
 珍碩 十七

900

法
海
寺



寺町二条上町
井筒屋庄兵衛板

